

村上春樹『かいつぶり』 レポート集

(第26回)2023年8月26日(土)13:45～「かいつぶり」第1回討論
(第27回)2023年9月16日(土)13:45～「かいつぶり」第2回討論
2023年10月14日(土) 「かいつぶり」レポート締切
(第28回)2023年10月21日(土)13:45～「かいつぶり」第3回討論

目 次

- 村上春樹「かいつぶり」……………田中 克典 (2)
- 言葉と世界 — 村上春樹『かいつぶり』を読む — ……佐野 之人 (4)
- 村上春樹「かいつぶり」を読む
——言葉だけでは人は動かない——……………渡辺 優 (9)
- 「かいつぶり」レポート——無意識を深く潜る話——…………… T.T (11)
- 村上春樹「かいつぶり」：読書感想文
——『《かいつぶり》の ^{ローズ}薔薇』……………奈原 伸雄(14)
- 村上春樹「かいつぶり」……………岡部 昌平(18)
- カレンダー……………大藤 渉 (20)
- 議論に勝つためだけの言葉
——村上春樹「かいつぶり」を読む——……………村上 林造(25)

村上春樹「かいつぶり」

田中 克典

物語のタイトルは、「かいつぶり」。手元にある、ポケット図鑑・野鳥（成美堂出版 1993 年版）によれば、概要、以下のように掲載されている。

カイツブリ科の水鳥で、体長の小さい順に以下の種類がある。

カイツブリ	全長約 25 センチ	留鳥
ハジロカイツブリ	全長約 30 センチ	冬鳥として渡来し越冬
ミミカイツブリ	全長約 35 センチ	冬鳥として渡来し越冬
カンムリカイツブリ	全長約 55 センチ	冬鳥として渡来し越冬

タイトルの「かいつぶり」がどれを想定しているのかは定かではないが、物語の終盤で登場する「手のりかいつぶり」を想定すると、最小とされる「カイツブリ」かもしれない。だが、そんなことはこの物語で大きな意味は持たないだろう。ただ、掲載された写真は、およそ人間社会の喧騒とは別世界を生きているようである。

ところで、我々は、生きていくうえで、やむを得ず何かにしがみつこうとする。それは現実的な生業に関することが多い。その一方で、その心の奥底に、非現実的な願いの様なもの～妄想といってもいいのか見知れないが～を持つことがある。当人がそれに気づいているか否かは別として。

この物語は、このような人間心理を扱ったものではないだろうか？

物語の主人公である「僕」は、失業中で、離婚した妻への離婚手当、月賦の支払いに追われながら、汚く狭い安アパートに住んでいる。そんな厳しい現実から抜け出すためにやっと見つけた「うまい仕事」にありつこうとやってきた会社の事務所。そこでの奇妙なやりとりがこの物語の中心だ。

もともと、この事務所にたどり着くまでの道程が不可思議であった。そもそも、会社からのはがき（採用通知と思われる）に書かれた道順が意味不明なものであった。しかし、僕にはそのことで真剣に迷う余裕はなかった。なんとしてもやっとのことでみつけた「うまい仕事」にたどりつくには、先に進むしか僕には道はなかったのだ。まさに一心不乱に前進して、ようやく事務所らしきものにたどり着いたのだ。それは、はがきで指示された時間に対し、5分の遅刻だった。

この事務所の中に入ることも大変だったが、なんとか、受付的な人物（？）に面会できた。ところが、そこで、その受付人物から、代表者への取次のために、合言葉が必要だと、当然のように告げられる。僕は、そんなことは事前告知されていないので当然対応できない。しかし、この「うまい仕事」にありつかなければならない僕にとって、「知らない」では済まされない。何とかクリアしなければならない。そのために、受付人物に対し、手練手管で迫っていく。そうして、ようやくのことで、合言葉なるものが「かいつぶり」という言葉だということにさせ、なんとか、代表者に取次させる。事務所に到着してから10分が経過していた。

ここまでは、僕の独白でこの物語は書かれている。

ところが、ここから、第三者の叙述で物語が進み始める。事務所受付所の先の扉の向こうに座る代表者は、「手のりかいつぶり」だというのだ。しかも、僕と同じような生活上のトラブ

ルを抱えている。いや、僕も考えていない「死」まで考えている。そんな「手のりかいつぶり」が、「僕」の来訪を受付担当者から知らされて「15分の遅刻」と独白した、ということでこの物語は終わる。

僕が、どうなったのかは想像するしかない。ただ、当初考えていたような「うまい仕事」にありつけなかったことだけは確かだろう。

人間は、追い詰められた状況に於いては、そこからの脱出手段をいろいろ考える。そして、その一つの方法を、苦境脱出の唯一の手段として思い込み、そこにしがみついてしまい、冷静な判断ができなくなってしまう。この物語の僕も一見そんな状況である。

僕は、自分の生活状況の苦境からなんとか脱出したい、そのための唯一無二の手段が、このはがきのうまい仕事にありつくことだと思い込んでいた。その思い込みへの執念が僕をこの事務所の代表者への扉をこじ開けさせるところまで行き着かせたように見える。

しかし、常識的に考えて、事務所への道順自体が怪しい、また、受付担当者からの合言葉なるものの告知もいわゆる「ブラック企業」であることの予告のような、こんな事務所にうまい仕事があると考えられるだろうか。

僕は、本当にこの「うまい仕事」にありつくことを実生活の危機を脱出の唯一無二の手段と考えていたのだろうか。いや、そうではなくて僕の心の底には、世間のしがらみから解放されて、「かいつぶり」のような水鳥的な自由気ままな生活への思いがあったのではないだろうか？そして、もしうまくいかなければ、死すらも受け入れるような思いがあったのではなかろうか。それが僕にとっての深層心理だったのではないか。

その深層心理は、本人がそれをそれとして認識することも困難なもので、知らず知らずに引きずり込まれていくものではないか。干上がった排水溝のような廊下をさまよう僕は、水路を探し求めるかいつぶりではないか、洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせる受付担当者は、水浴びをしていたかいつぶりだったのではないか。僕は、事務所への行程をたどりながら、自分でも気づかぬうちにかいつぶりになっていったのではないか。僕は、はがきによってではなく、自分の深層心理によって、この事務所に引き寄せられ、受付で合言葉を求められ、思案した挙句「かいつぶり」という、自分の心の奥底にあった言葉を発したのではない。

ただ、問題はもっと複雑だ。「かいつぶり」の生活も僕が考えるような甘いものではないのだ。人間の求める生きがい、幸せ、を実際に見つけることなど到底不可能だ、それでも、人間はそれを追い求める。そのために、いくつもの門をこじ開け、くぐろうとする。僕がくぐろうとする事務所代表者への扉も、その一つの門なのだ。しかし、実際にその壁をくぐることすら困難なのだ。手乗りかいつぶりが最後の発した「十五分の遅刻」という言葉は「本当の自分に到達するのに、15分も遅刻する人間にこの扉は開けないぞ、別の扉を見つけてこい」という通告ではないか。こうして、人間はその生きがい、幸せを追い求め続けるのではないか。物語最終盤を語る第三者は、そんな人間を冷やかに見つめる天の声ではないか。

そのような人間の本質を描いた物語として読んでみた。

以上

言葉と世界

——村上春樹『かいつぶり』を読む——

佐野 之人

はじめに——我々の日常性——

我々はそのつど世界のうちに生きている。ただ一人の「私」が一貫して（他のものや他の人とともに）ただ一つの「世界」に生きている、というのは我々の願いが生み出した抽象にすぎない。それでは、というので、書斎にいる「私」、職場にいる「私」、居間にいる「私」など、私はそれぞれの「世界」のうちでそのつどの役割をもった「私」として生きている、と考えることもできるかもしれない。こうした「世界」は人生のある時期に決定的な決断（就職する、結婚する、家を建てるなど）をした結果であるが、そうした様々な「世界」が存続していて、そこへと役割を負った「私」が入って行くというように考えているのであれば、それも我々の願いが生み出した抽象にすぎない。我々は端的にそのつどの世界をそのつどの私として生きているのである。

こうした世界は言葉によって開かれる。声に出さずとも、あるいは明確な意識を欠いていてもそこに相応しい言葉によってそのつどの世界が開かれる。自分の居場所がどこであるか、自分と出会っている者が何者か、自分が何者であるかを定めるのは言葉である。その言葉が「相応しい」かどうかは分からない。分からないけれども我々は言葉を与えなければならない。そうでなければ我々は何をしたらよいか分からないからである。このことが人間の命にかかわることであることは火急の事態の際のことを考えれば容易に分かるだろう。

しかし「言葉を与える」のである以上、ここには言葉にならないものに我々が絶えず直面しているということがあるのだが、そのことは通常意識されることはない。言葉によって世界が自分に相応しく開かれていると思われているのが日常性ということであるが、こうした日常性において、我々は自らの営みをことさら意識することはない。こうして我々は自らが与えた言葉通りの世界のうちで自らが与えた言葉通りの私を生きることになる。

しかしこうした世界に居心地の悪さを感じ、この世界を超克して新たな世界に移り住もうとする時、日常的にはまったく無意識的に行われていたことが意識されるようになる。こうしてすべては探求となり、問いとなり、それに対して自覚的にぴったりとした言葉を与える営みとなる。

村上春樹の『かいつぶり』はまさにこうした魂の出来事に言葉を与えたもののように思われる。私はこの小説の世界を「世界と言葉」という合言葉によって開けてみようと思うのである。それによって我々にどのような世界が開けるのであろうか。テキストは『村上春樹全作品版』に従う。

『かいつぶり』を我々の魂の出来事として読む

「僕」は現在の生活に「うんざり」している。そのなかで「うまい仕事」がないか探し、それをやっと思つつける。届いた「葉書」のとおりに進めば、その仕事にありつつける。我々の現在の

世界にも、何故そうでなければならぬのかは分からないけれども、従わなければならないルールがあり、しなければならぬことがある。そうした一切の「何もかもにうんざりする」ということはあり得る。そうしたなかで我々はそうした世界を脱してすべてがうまく運ぶような都合の良い世界を夢見る。そうした世界への行き方を示すような教えの言葉もこの世界にはある。我々はそれを頼りに、こうすればうまくいく、と信じ込んでその道を進む。初めは何をやっているのかもわからずに、ただそれに従ってひたすら進むのみである。「僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた」。一向に埒が空かないためにその道は「とても長い廊下」を歩んでいるかの如くに感じられる。言い古された教えの言葉は「干上がった排水溝みたい」なもので、その道を照らす灯も多くの人の手垢にまみれ（「たっぷりとほこりをかぶって黒ずみ」）、その光は「疲弊」している。

世にある教えの言葉は所詮他人の言葉である。真に自分の言葉になってはいない。それゆえ必ず行き詰る。それが「T字路」である。もう一步も進めなくなる。行き詰っても手持ちのものは他に何も無い。ここで「僕」が「形而上学的なドア」や「象徴的なドア」、「比喩的なドア」を探していることに注目したい。「形而上学的なドア」は哲学の言葉で開くドアで、そこには哲学の世界が開けるはずである。「象徴的なドア」や「比喩的なドア」は宗教や芸術の言葉で開くドアである。あるいはこれは単にドアがまったく無いということと言おうとしている修辞にすぎないのかもしれない。しかしこれらの表現は言葉によって何らかのドアが開くことがあることを想定していなければ出て来ない。

それにしても形而上学や宗教、芸術の言葉でも開かないドアとは何であろう。それはおそらく、言葉以前、言葉にならない世界を開くドアではなかろうか。いずれにせよ、我々は一切の出来合いの言葉を失う。とはいえそれでも前に進む以外ないということであれば（「ドアが見つからないなら、見つかるまでどこまでも前進するのみだ」）、手持ちの教えの言葉の中であれこれやってみるほかはない。どれを選ぶか、そこに根拠はない。それが「十円玉」である。もはや賭けるしかない。

そうした探究の道をひたすら前進しているうちに、ふと「ドア」らしいものが見えてくることがある。それは「使い古しの切手のように見えた」とある。やはり言い古された言葉を連想させるが、切手であるということで、自分に宛てたものであるという印象を読者に与える。ずっと前から自分に宛てて送られてきた言葉なのに、封も切らずに放置していた手紙なのかもしれない。こうして我々はどうやら新しい世界の入り口（ドア）らしいものにたどり着き、ドアも次第にドアらしくなり、ついに「一枚のドアになった」。いよいよ核心の現前である。「僕」はそのドアを三度目にノックしようとしたところでドアが音もなく開く。それは「まるでどこから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だった」という。このドアが仮に言葉以前の世界を開くドアであるなら、「僕」はすでにそうした世界に触れていることになる。そうしてそのドアは突如としてこのように開くものなのだろう。

しかし「もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった」。何故なら「僕」はそこに門番のような「一人の男」を見出したからである。その男は「葉書」の言葉では通してくれず、合言葉を「僕」に要求する。この男は「昼飯の後には必ず風呂に入らなくちゃいけない」というルールに従い、「ドアを開けて、上の人に取り次ぐっていうこと」を仕事にし、「合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われている」。この男は「僕」や我々が住んでいる世界とは別の世界の住人のようであるが、「僕」同様、あるいは我々同様、何故そのルールに従わなければならないのか、何故それをしなければならないのか分からないままに、一定の世界のうちに生きていくようである。

「僕」は合言葉を知らない。「葉書」にも合言葉については何も書かれていない。「僕」は「葉書」の言葉を頼りに、「僕は採用されて今日からここで働くことになっているんですよ。上の人に訊いてもらえれば、そういう指示が出ていることがきっとわかると思うんですよ」と食い下がる。言い古された教えをもとに、それに従って進んできた、その言葉には新しい世界に入れると書いてあるのだから、新しい世界に入れて当然だ、ということであろう。しかし男は「そうするには合言葉が必要なんです」と、許してくれない。言い古された出来合いの言葉ではだめだ、お前だけに宛てられたおまえだけの言葉を言ってみろ、ということだろう。「僕」は男の出したヒント、すなわち「水に関係があって、手のひらに入るけれど食べることはできない、かで始まる五文字のことば」をもとに、「かいつぶり」が合言葉であると主張する。しかし男は「合言葉はかいつぶりじゃない」という。しかし「僕」はヒントに合致するのは「かいつぶり」しかない、もしあるなら証拠を示せ、と強弁する。もちろん男はそうした証拠を示すことはできない。示せば答えを言うことになるからだ。もっとも反例を正解以外に知っていれば困ることはなかったのだが、そこまでの知識がその男にはない。結局この男は〈それは合言葉じゃない〉と言うことしかできない。それにもかかわらず、この男は最後には「僕」を「上の人」に取り次いでしまう。

これは我々の魂の中のどのような事柄を描写しているのだろうか。使い古された言葉で固められたこの世界を脱するには、新しい言葉が必要だ。このドアが言葉にならない世界を開くドアであるとすれば、ドアが「音もなく開いた」瞬間に我々は言葉以前の世界に触れている。しかしそこから先に進むには新しい世界を開く言葉が必要なのであるが、我々はそのような言葉を持ち合わせていない。そもそもそこに開かれている世界は言葉にならない世界であるから、我々は言葉を失い、絶句するほかはないのであるが、番人はそれを許さない。やむを得ず我々はヒントをもとに「どうして...急に思いついた」のかも分からない言葉で何とか通してもらう外はない。番人はもちろん〈それは合言葉じゃない〉と言ってくる。結局何を言ってもダメ、何も言わなくてもダメ、ということになる。しかし我々もそれしか言葉がないとなれば、それで押し通すしかない。

言葉にならないものに与える言葉がそれしかない、という確信が疑いを容れないものになるとき、我々はすでに古い世界を脱している。言葉にならない世界にすでに接しているからだ。そうしてその新しい言葉が新しい世界を開き、我々は新しい私としてその世界の住人となる。その言葉が「手のりかいつぶり」であれば、「僕」は文字通り「手のりかいつぶり」になってその世界の住人になる。その時には「僕」はすでに探究者（「客」）ではなく、新しい言葉で新しい世界を開いた、「上の人」になる。

「手のりかいつぶり」が「僕」であることについては異論があるかもしれない。しかし「手のりかいつぶり」が「僕」の言葉であること、「手のりかいつぶり」が以前の「僕」と同じような悩みを抱えていることを考えると、必ずしも無理な解釈ではないだろう。

新しい世界とその住人である「僕」（「手のりかいつぶり」）についてはいくつかのことを指摘できる。古い世界が言葉のない世界に触れることを通じて破られて、新しい世界が生まれるのであるが、新しい世界も言葉によって、それも言葉にならないものを敢えて言葉にした、そうした言葉によって開かれた世界であるため、言葉によって成り立っているという点で本質的に古い世界と同じ性格をもつ。もちろん、以前の世界と現在の世界の間には断絶があり、以前の世界から現在の世界を窺い知ることはできない。以前の「僕」から見れば「手のりかいつぶり」は自らの将来の姿である。自らの将来の在り方は自分が実際にそれになってみなければ分からない。同じことが世界についても言える。以前の「僕」は自分の将来についていろいろと

夢を抱いていたが、実際にそれになってみると、以前夢みていたようなものとは全く異なったものになっていることに気付く。以前の「僕」も月賦の支払いなど、生きていくうえでの「何もかもにうんざりしていた」が、バラ色のはずであった将来も実際は歯医者、確定申告などの煩わしい出来事があり、「手のりかいつぶり」もそれに相当「うんざり」している。人間が言葉の世界に生きる以上、本質的に同じことが繰り返される。同じように古い世界にうんざりし、新しい世界を夢見ては、その新しい世界にうんざりする。

「手のりかいつぶり」は将来の「僕」である。将来の「僕」が以前の「僕」に「葉書」を書き、「僕」の到着を待っているのである。以前の「僕」にとって将来の「僕」は予め窺い知ることのできないという意味では、別人格である。そうした将来の「僕」との出会いは、将来の「僕」にとっては以前の「僕」の到来という形を取る。我々が古い世界にうんざりし、そこからの脱出を図る際に手に取る書物、目にし、耳にする言葉の一つ一つがじつは将来の「自分」からの「葉書」すなわち、「これを手に取って読め」、「これに従って進め」というメッセージなのかもしれない。

そのようにして我々は曲折を経ながらも事柄の核心にまで導かれる。どこまでも分からないものに触れ、言葉を失う、絶句する経験とともに、それを自らの言葉で言い表すように強要しながらも、如何なる言葉も中せずとして拒絶する者が我々の目の前に立ちほだかる。それがこの小説では「番人」として登場する。この「番人」も将来の「自分」に命じられてその任に当たっているのであるが、この「番人」も「上の人」がどんな人か知らないし、会ったこともない、とされる。我々が会おう「番人」もただ現在の我々の言葉にのみ関わり、将来のことには関わらない。そうして我々がこの「言葉」しかない、という確信に至ると、「番人」は、その「言葉」に他ならない、将来の「自分」に我々を取り次ぎ、我々は将来の「自分」との出会いを果たすのである。

古い世界と新しい世界が本質的に変わらないことを確認したが、それでも違いはある。以前の「僕」は「貧乏な生活」にうんざりしていたが、「手のりかいつぶり」は「皮ばりのアームチェア」に腰掛け、「ビロード」の布で眼鏡のレンズを拭いている。全体的な印象としては、裕福になっており、「手のりかいつぶり」を将来の「僕」と想定する根拠になるかもしれないが、年老いた印象を受ける。また悩みの内実にも変化がみられる。以前の「僕」はひたすら現に生きることの苦悩を訴えていたが、「手のりかいつぶり」は「死について思いめぐらし」ている。しかし「死は海の底のように静かで、五月の薔薇のように甘美だった」等とあるように、多分に観念的、感傷的、自己陶醉的、現実逃避的で、死が真に自分の死として現実的に受け止められていないという印象が強い。要するに「手のりかいつぶり」も現在の世界にも「うんざり」しているのである。そうであれば、以前の「僕」がそうであったように、何らかの仕方でこの世界からも脱出しようと試みるに違いない。そうしてまた本質的に同じような別の世界の住人になりつつ、その悩みは年齢や経験とともに、深まっていくことが予想される。最終的には言葉の世界を生死せざるを得ない人間存在の苦悩にまで行き着くはずである。生も言葉、死も言葉である。人間は言葉の真の意味が分からないままに生死しなければならぬ。ここに人間の苦悩がある。この苦悩は世界をどれだけ更新してもなくなることはない。世界が言葉によって開かれるにもかかわらず、その言葉は根本的にはどこまでも不明、不可知だからである。しかし言葉の意味が根本的に不明、不可知であるからこそ、言葉を通じて、我々にどこまでも世界が開かれることになる。

先に現在の「自分」を導いているのは将来の「自分」であると言った。世界が言葉を通じてどこまでも開かれて行くのであれば、最終的な「上の人」にして、現在の「自分」を最も根本

的に導いている者は一体何者であろうか。おそらくそれは言葉以前の本来の「自分」ということになるのだろう。もちろんこれもすでに言葉である。

おわりに——この作品における「形式」に関する「実験」——

この作品における「形式」に関する「実験」とは何だろう。今回の「実験」も読者を念頭に置いたものであるが、それは、果たして読者がこの物語を自らの内なる出来事として経験し、無自覚に行われている人間の日常性の考察に向かうかどうかの実験ではないだろうか。そう考えられるのは、この小説にはいくつかの仕掛けがあるからである。小説では最後に「手のりかいつぶり」が客の到来について「十五分の遅刻」と述べている。これを読んだ読者はこの「客」が「僕」であると考えよう。何故と言って、もともとの「五分」ほどの遅刻に、番人とのやり取りを加えれば、ほぼ「僕」の遅刻は「十五分」になるからである。この小説ではこうした読者の心の動きが想定されている。また一行空いたところで、読者は合言葉である「手のりかいつぶり」が突然登場していることに驚くだろう。そこで一体「手のりかいつぶり」とは何者か、という問いが当然起こる。そうして合言葉、およびそれを発した「僕」と「手のりかいつぶり」との関係を考え始めることになる。そうした考察の材料として、「手のりかいつぶり」に以前の「僕」と同じような、しかしグレードアップした境遇が提示されている。かくして読者はこの「手のりかいつぶり」は将来の「僕」の姿であり、ここでは以前の「僕」と将来の「僕」との出会いが語られているのではないか、という解釈に導かれる。ここで物語られているのが将来の自分との出会いであれば、この小説の全体が、その初めから、読者自身の内面の出来事である、という解釈に導かれてもおかしくはないだろう。この小説ではそうした読者の心の動きが起こりそうな仕掛けが予め設定されているように思われるのである。

もちろんこうした解釈自体が「言葉と世界」という合言葉によって、この物語の世界をむりやり開けた結果に他ならない。それゆえ本当に世界は開かれたのであろうか、という疑念、居心地悪さはどこまでも消えない。しかし他面から見れば、こうしてどこまで疑念が残り続けるということが、言葉で世界を開かざるを得ない人間存在を証ししており、それこそがこの小説の味わい所だと思われるのである。

村上春樹「かいつぶり」を読む

——言葉だけでは人は動かない——

渡辺 優

1. はじめに

短編集「カンガルー日和」について、村上春樹は「料理で言えばヌーベル・キュイジーヌ的」であると
言う。このことを村上先生は、『きわめて身近にある日常的な素材を用いながら、さまざまな新しい表現
の可能性を模索し、手探りする、異なる独創的な「短編近似作品」の試みであろう。』と解説している。
(「青燈」第 23 号: 言葉を通して言葉以前に触れる—村上春樹「タクシーに乗った吸血鬼」を読む—より)
そして、その試みられた方法的実験を明らかにしてきた。

また、当読書会において取り上げた「カンガルー日和」短編集の 1 編である「1963/1982年のイパ
ネパ娘」についても、村上先生は「言葉で語れぬものをどのように語るか」(「青燈」第 25 号)と、言葉を
一つのキーワードとして論じられている。このようなことから、今回の「かいつぶり」についても、「言葉」に
関する論点があるのではないかと思い、考察してみたが明確な視点を見出せなかった。

2. 読書会討議から示された論点

「かいつぶり」とは、僕が勝手にこじつけたでたらめな合言葉であり、本来それでは開かないはずのド
アが開く。

- ・「言葉」で「扉を開く」とはどういうことか？
- ・「言葉」と「扉を開くこと」と「生きること」の関係は？

3. 考えたこと

「言葉」というところから、僕と門番の会話に的を絞り考えてみた。

門番が登場する場面は「男は二十代半ばというあたりで、身長は僕より五センチ低い。洗ったばかり
の髪から水滴を滴らせ、裸の体をエビ茶色のバスローブに包んでいた。」という門番の姿である。そして、
門番の最初の発話は「すみませんね、ちょうど風呂に入っていたものですから」というものである。この
視覚で捉えた姿と fu/ro という音で、僕は門番が風呂に入っていたと理解している。そこで、「風呂？」と
言ってから僕は反射的に腕時計に目をやった。と動作を起こしているが、これは風呂に入るのは、一般
的に夕方か夜に入るものだという概念を持っているためだと思う。もし、仮に門番がこのときに「シャワー
を浴びていた」と言ったら、反射的に腕時計に目をやるという動作は起きなかったかもしれない。このよ
うに言葉で表される意味や概念によって、同じ状況でも違った行動を起こさせてしまうのであろう。

次に門番が「規則なんですよ。僕らは昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけないんです」とい
う言い訳に「なるほど」と答えているが、ここでもすでに「規則」という言葉に、規則は守らなければなら
ないものだというものが僕の中に観念として存在している。「規則」だけで「なるほど」を誘発させている。
「風呂」、「規則」の概念は門番と僕の間では、ほぼ一致しているので不都合は生じていない。
次に、門番が求める合言葉であるが、本来、合言葉の機能としてはシニフィアン(記号＝文字や音)だ
けでいいはずである。しかし、言葉にはシニフィエ(表される意味や概念)があるので、門番はこのシニ
フィエを利用して合言葉を導き出そうとしている。普段、我々は言葉を聞いてその言葉から図像やイメ
ージ、概念を思い浮かべているが、この場合は先にイメージ等があり、そこから言葉を導き出そうとして
いるのである。しかし、そこで思い浮かべられるものは人によって異なるし、時には全く別物である可能

性さえ否定できない。

門番が提示したシニフィエは、①水に関係する、②手のひらに入る(形態)、③食べられない(機能)の三つの条件であるが、これは門番がもつ合言葉に関するイメージや概念であって、当然、人によっても異なるであろう。事実、読書会討議においても佐野先生の「これはかたつむりだな」という発言に対して、かたつむりは食べられる、食べられないの議論があったように、人それぞれ思いは違ってきている。したがって、この三つの条件から合言葉を導き出すのは、偶然性がない限り不可能である。次に出てきたヒントは〈ka〉という音であり、このヒントで「貝がら」と答え、さらに五文字というヒントで「かいつぶり」という言葉を出した。こうなると、シニフィエの持つ多義性は弱点となって、こじつけ合戦になっていった。

合言葉がある以上、門番と僕の言葉が一致しなければ扉は開かないはずだが、この場合は開いてしまったのはなぜか。

会話とは情報伝達の行為と同時に、相手との人間関係を配慮しながら行われるものである。この場合、門番と僕との関係性はそれほど悪くないと思われる。したがって、門番の内面には僕との意見の不一致は最小にして、意見の一致を最大にしようとする感情が無意識のうちに働いているのではないだろうか。その証拠が上役に話した最後の言葉「今日からここで仕事をするそうです。合言葉も言いました」と「かいつぶり」を合言葉と認めてしまっている。人を動かすものは、言葉と同時に互いの感情が大きく作用するのではないだろうか。

以上

「かいつぶり」レポート

— 無意識を深く潜る話 —

T・T

かいつぶりと言えば、子どもの頃から近所の公園の池でよく見かけました。小さい地味な水鳥で、時々ずっと水面下へ潜ると、随分長い間姿を見せず、どこにいったのかなと見渡すとかなり離れたところの水面からずっと現れるので、忍者みたいと思っていました。

この小説のご本尊であるかいつぶりについて、登場人物たちは、見たところがない、と口を揃えています。

門番が「東京の町中で育った」から「かいつぶりなんて見たこともありません」と言ったりして、まるでかいつぶりを知らないのが都会人みたいで鼻についてしまうのですが（ていうか、皇居のお堀にもいますし <https://www.kunaicho.go.jp/event/yacho/kaitsuburi.html>）、だからといって作者がかいつぶりのことを知らなかったとは思えないです。潜水が上手い鳥ということも知っていたはずですよ。

この小説は、

- 自分自身を立て直す必要のある、チャランポランな「僕」が、
 - 無意識の世界を深く潜り、
 - 執念とセレンディピティによって、あと少しで自らの本質＝かいつぶりに至る寸前までは行くけれども、
 - 結局、本質に至るための探究にはきりがなく、
- ということを描いていると思います。

自分自身を立て直す必要のある「僕」

「僕」は貧乏で、家庭も失い、浴室にゴキブリが湧くような荒んだ生活をしている様子です。小説の最初の段落に、廊下の蛍光灯について「その光はいろんなひどい目にあわされた末にやっとここまで辿り着いたのだといわんばかりに不均一で、疲弊してた」とありますが、これは「僕」そのものの描写のようです。経済的にも、精神的にも、自分自身を立て直す必要がある状況にあると思います。

チャランポランな「僕」

「僕」は結構適当というかチャランポランな人物であるように私には思えます。それが荒んだ生活に起因するのか、それともそんな「僕」だから荒んだ生活に転落したのか、どちらかはわかりませんが。

まず、仕事の初日に運動靴を履いています。この時代ですから、運動靴にスーツはないでしょう。多分、服装もカジュアルだと思います。初日であれば（この時代であれば尚更）きちんとした恰好をするものではないでしょうか。

次に、「上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し」とありますが、「やっとみつけたうまい仕事」の案内を一体何故くしゃくしゃにしてしまうのか・・・まるで小学生男児

のようです。

さらに、T字路で道を決めるのにさらっとコイントスをしています。薄暗がりの中、銜え煙草で。絵面からして如何にも山師っぽいです。

無意識の世界を深く潜る

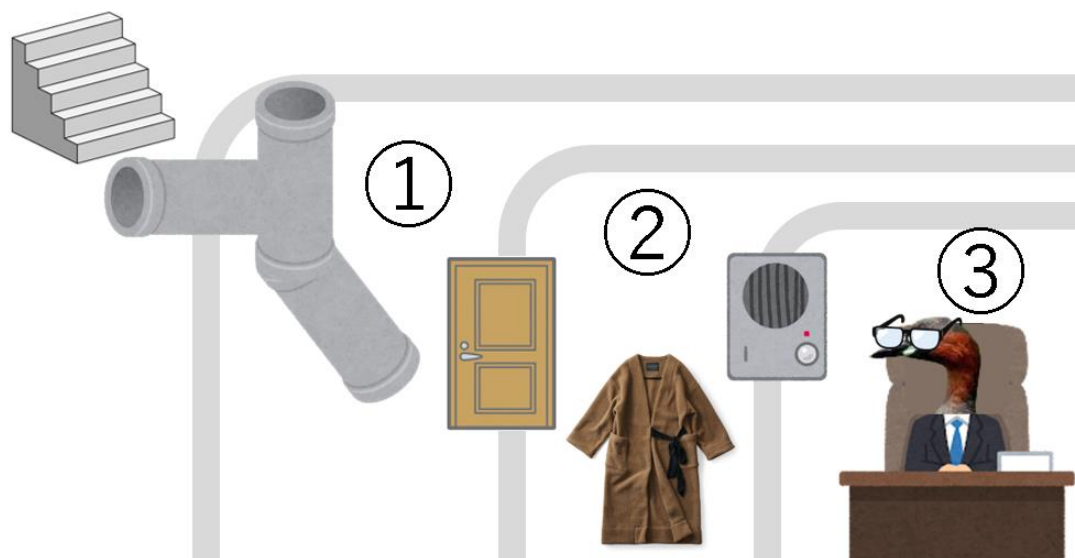
小説の冒頭、「僕」は階段を降り、薄暗い長い廊下を通ります。「そこには距離もなければ時間もなかった」のは、それが不思議ワールドへの通路だから、でしょう。何故「僕」が不思議ワールドに行くのか、それは「僕」が自分自身の立て直しを迫られているからです。

一般に、自分を立て直す必要がある人がやらなければならないことは、先ず自分を見つめ直すことだと思うのですが、「僕」は無意識という不思議ワールドに深く潜っていくことで、知らないうちにそれを果たそうとしているような気がします。

この小説の不思議ワールド（と、それが隠喩として対応する無意識領域）は、3つのエリアに分けられます。

- ① T字路から先の廊下からドアまで（無意識のうち意識に最も近い部分）
- ② 門番の部屋（①と③の間、本質的部分の表層にある）
- ③ かいつぶりの部屋（最深部にある本質的部分）

これらの領域を分ける境界が、①と②の間と、②と③の間にあるということになります。①と②の間にはドアがあり、ドアが開けば行き来は可能です。②と③の間には、インタフォンを介した声のやりとりしか描かれていませんが、おそらく壁もあるはずです。



執念とセレンディピティ

「僕」がドアまで辿り着き、門番と押し問答して合言葉のヒントを貰い、デタラメな思いつきを合言葉としてゴリ押しすることで取り次いでもらえたのも、1つは執念のおかげです。しかし執念だけでなく、ドアに至る道順も運任せですし、口から出まかせの合言葉「かいつぶり」が実は雇い主であったりして、偶然の力が大きく働いていることも示されていると思います。チャランポランさのためか、少なくとも私には「僕」の執念もセレンディピティもどことなくユーモラスに感じられました。

「僕」の本質=かいつぶり

かいつぶり、つまり「深く潜る小さな水鳥」は「僕」の無意識の最深部にある本質的部分を具現化したものではないでしょうか。「僕」が地下道の奥にあるエアコンの効いた気持の良いオフィスに憧れるように、かいつぶりも墓石の下の甘美な死に憧れています。「僕」も「かいつぶり」も、ろくでもないこの世界を離れ、アナザーワールド目指して深く潜りたいのです。門番は隠喩として、かいつぶりという本質的部分の門口に相当するはず、と考えてみますと、少なくともその外見はかなりかいつぶりに寄せられている気がしてきました。

- 身長が低い（かいつぶりは小さな鳥）
- 風呂上りで濡れている（かいつぶりは水鳥）
- えび茶色のバスローブ（かいつぶりのオスと同じ色）

単に上役であるかいつぶりの趣味ということかもしれませんが、このような類似性が、合言葉としてかいつぶりを思いつづためのヒントになったのかもしれない。

寸前までは行くけれども、結局、本質に至るための探究にはきりがない

「僕」は門番に、上役に取り次いでもらうところまでは漕ぎつけましたが、そのあとかいつぶりと対面したのかは明らかではありません。しかし、読者にはかいつぶりの姿は示されます。湖沼に棲むかいつぶりが水面下へ潜っては、離れたところの水面からすつと現れるように、門番と話している「僕」が読者の視界から消えると、手乗りかいつぶりというかけ離れた姿をして再登場したということなのかもしれません。もしそうだとすると、この小説が描いているのは「僕」の無意識探索を通じた一つの成長物語なのではなく、潜水を繰り返していると思われる「僕」の現在地を詳らかにする一種の絵画なのだろうと思います。

革張りのアームチェアに座っている手乗りかいつぶりは、「僕」の本質的存在ではありますが、そのかいつぶりにとってはさらなる本質的存在として墓石の下に眠る自分を思い描き、しかし実際墓石をめくってみるとそこにはまた似ても似つかないものが現れて・・・こんなふういきつと、きりがないのではないのでしょうか。

<感想>

この小説全体にあるちょっととぼけたような味わいは、結構好きです。

関門を突破するには正攻法なんてものではなく、厚かましい執念と幸運な偶然が必要、というのも何だか実生活で思い当たりますし、無意識にある本来的な自分とは意識的な自分が思いつかないような突飛な存在かも知れない、というのもそうかもしれないという気がします。

「駄目になった王国」でも思ったのですが、「僕」は無意識から豊富なモチーフを得ることのできる創造的な人物で（「駄目になった王国」では小川の魚、「かいつぶり」では潜水するかいつぶり）、それはそのまま作者の豊富な創造力を表しているのかな、とったりもしました。一つ残念なのは、「15分の遅刻」が上手く読み解けなかったことです。もう時間切れですので、皆様のレポートに期待しつつこのレポートを終わらせて頂きます。

村上春樹『かいつぶり』:読書感想文

『《かいつぶり》の^{ローズ}薔薇』

Oct.14.'23

奈原 伸雄

I 理由のないものはない

「すべてのものには理由がある」¹⁾という。「理由律」、あるいは「充足理由律」と言うらしい。それが本当なら、《かいつぶり》というタイトルの最初から、《「十五分の遅刻」》という最後の一句に至るまで、とことん意味不明なこの小説にも、何か訳があるのだろうか(《》内はテキスト『村上春樹全作品』版からの引用。以下同じ)。まず思いつくのが、《かいつぶり》が「留鳥」²⁾であって、体長26cmほどの水鳥であること、要は、渡り鳥ではないという事実である。書出しは、主人公が就職しようとする場面であるらしいので、この言葉から連想するのはまずは我が国の「雇用慣行」ということになろうか。あまり文学的なテーマとは言えないが、徹底して労働移動が少ないこの国のこの慣行はもはや「神話的、^{ひところ}でさえある。一度採用されたら一所から容易に転職しない慣わしは、まるで《かいつぶり》のそれだ。最近使われ出したリスキリング³⁾というのは、実質的にはもう半世紀以上も前から、この国に依然として根強い日本型経営の課題であって、目新しいのはヨコ文字だけである。

II 主人と奴隷の逆理

わが国の企業の採用試験は、かなり古いわが記憶に依ると、手続きのための手続きのような、何が何だかわからない面接の積み重ねに終始する。大学卒業見込みの者に対しても、ついぞどんな学問を修めたかなどと優雅な質問はしない。ちょうどこの小説の、短編にしては冗長な《合言葉》の探り合いのようなものだ。その掛け合いの中で、どういう訳か《かいつぶり》が浮上して、いつの間にかそれが《手のりかいつぶり》になる。この間の変化といえば、鳥の体長が随分圧縮されて、これから一見雇用条件の良さそうな、それでいてどこかいかかわしい、この職場で籠の鳥のように働かされる《僕》を象徴すると思って読み進めていると、いつの間にか《手のりかいつぶり》は雇用主のメタファーになっていた。あたかも、「主人と奴隷」の立場の一発逆転⁴⁾である。無理に託けるつもりはないが、かつてある外務大臣が、自嘲気味に、殆どあきらめ顔の苦笑いをして、「私はまるでギリシアの奴隷だ」と漏らすのを目の前で聞いたのを思い出した。あれは冗談ではなかったのだ。位人心を極めても、下から存分に使われるのが大臣の任務のすべてであった。

III 経済活動の自由

外からは中々見えないが、閣僚の外交日程は過酷である。今日も、明日も、国境を越えて、時差は次の時差で相殺される。理解しがたいことに、こうした外交による国益追求より名目上優先するのが、国会における官庁文法の棒読みである。これでは、国会のメンツは立っても国益と本人の体力を著しく消耗する。それに些細でも、限界効用の大きいスキャンダルで容易に

名誉を失う。これがエリート政治家の宿命としたら、同じトップでも、中小の事業主の境涯はもっと過酷だろう。それは、この作品の最後の一句がリアルに語る。《手のりかいつぶりは眉をしかめて腕時計を眺めた。／「十五分の遅刻」》……。経済活動の自由は、経済人が「時間の奴隷」になることと引き換えに保障される。例えば、流通業界。コンビニの裏手には「在庫」も「倉庫」もない。それでも、3,000 アイテムの商品が店頭にタイムリーに整然と揃えられる。まさに、「物流の妙」である。物づくりの世界でも、自動車製造業は、本社工場に一次、二次、三次……と、ほとんど無限に連なる下請けのピラミッドが、「ジャスト・イン・タイムに」(必要なものを、必要なときに、必要な分だけ)部品を供給する仕組みを作り上げた。わずかに、遅れても、早まってもいけない。ピンの切っ先のわずかな揺れが巨大なシステムを震わせる。それを根本的に支えるのが、近年時間の関数の度合いを極限まで高めたカネであり、金融工学であり、まさに「タイム・イズ・マネー」である。「十五分の遅延」が「経済的な死」即ち倒産に直結することは常にある。こうして、われわれの便利過ぎる物質的生活は支えられている。

IV 地方創生の藪

地元中堅企業のある社長が、めずらしく欣喜雀躍していたことがあった。およそ10年前後の昔、この国が「地方創生」という奇妙な造語に染められていた頃のやや鮮明な記憶である。何と、県内唯一の国立大学の学生が自社の面接試験にエントリーして来たという。ところが、当日のこと、《五分ほど遅刻》でも、《十五分の遅刻》でもなく、結局は旅行業界で言うところの「no-show」(無断キャンセル)に見舞われた。一言で言えば「すっぱかされた」のである。大学による「地方創生事業」(どういう訳かCOC^{プラス}と言った)は、県内就職の促進による東京一極集中の是正を目的に、破格の国庫を投入して実施されていただけに、納税者の「草莽の怒り」は収まらない。この一事は、一時が万事というより、問題の核心を突いている。当の大学の本音も、大学生の彼らも、要するに自線が高い。中小企業は地元大手と目されても、人材確保のために地面を這う。障害のある人もない人も、手の施しようもない暴れん坊も、この上なくシャイな若者も、そして、刑期を終え離職率も再犯率も高い人材さえ、大切に引き受けて丁寧に育てる。生きようとする者に等しく潜在する勤労精神が、わが国の物づくりともてなしの産業システムに同調する。企業数で約99%、従業者数において約70%を占める中小企業⁵⁾は、実質的な意味でわが国の累々たる「教育機関」であった。

V 不知の知と不信の信⁶⁾

①《かいつぶり》が②「留鳥」であることから、この語は、《僕》がこの会社に採用され、終身雇用というわが国の雇用慣行に縛られて、③「奴隷」のような身分になることを暗示していると思われた。しかし、実際にはそれが逆転していて、雇用主の④「主人」が「奴隷」と同様の哀れな境涯にあることを意味していた。すなわち、この小説の主人公は、《かいつぶり》を思わず《僕》から、彼を雇用する事業主である⑤《手のりかいつぶり》に転換し、詰まるところ、究極の主人公は「実質奴隷」の《手のりかいつぶり》の窮境であった。筋立てを簡略化して示すと、次のようなフローになろうか。「①かいつぶり⇄②留鳥⇄③奴隷⇒④主人⇄⑤手のりかいつぶり」……。しかしながら、それにしてもなぜ《かいつぶり》なのか?いくら読み返しても、小編でありながら、この作者の作品の取りとめのなさはやり切れない。例えこうやって、

「①かいつぶり以後」の脈絡はある程度立ったとしても、最初に感じたところん意味不明なこの小説に、本当に「意味」などあるのだろうか？この問いを先鋭化させたら、「かいつぶり以前」の問題となり、さらに遡れば、われわれの自分たちが誕生する以前の、更にさらに昔の「祖先以前性」⁶⁾の問いに溺れることになる。そして、「世界がこのようにあることの理由の不在を目の当たりにして、理性は自身の有限性を痛感する」⁷⁾のであり、結局は「生きているとは分からないという状態のことだ」⁸⁾ということになる。これは、まさに哲学の始まりが「不知の知」であったことが、常に最新の哲学として問い直されていることを意味しないか。加えて、留意すべきは、国内外で信教を巡る問題が相い続く情勢を憂慮するまでもなく、宗教の根拠は「不信の信」であるべきではないか。

VI 薔薇と十字架

われわれは、このとても意味不明な小説を読む機会に恵まれた以上、「理由の不在それ自体を存在者の究極の特性と考え」⁹⁾ (傍点筆者。以下同じ)、これを「理性の優れた能力の結果として捉えなおし、理由の不在それ自体を絶対的な存在論的特性と考える」¹⁰⁾ことはそう難しいことではないであろう。ところが、教えられなくても、「不知の知」と「不信の信」の虚無の中を無心に生き抜く人々があることを思うと、とにかくにやるせない気持ちになってくる。作品にちりばめられた幾つかのキーワードを連ねて、「雇用問題」から「経営論」へ、「地方創生」から「大学論」へと連想を重ねて思うことは、実質的な意味で、雇用と所得の源泉であり、《確定申告》を欠かさない納税者である地域経済の担い手に対する、学術的な無関心と、社会的な悪気のない無知はどうにもなりそうにない現実である。やはり、《かいつぶりはこのところよく死について考えた》。《もううんざりだ。世界はろくでもないものにみちている》という彼らの意気遣いは、最も俗人と目されていながら、世俗の人たちには分かってももらえない悲しさである。この世で彼らが束縛される「時間」の桎梏ほど厳しいものはない。それは死に至るプロセスであり、徐に廃業したり、計画倒産などするには弁護士費用だけでも法外なものになる。むしろ「突然死」の方が随分気軽に死ぬ。しかしながら、それでも彼らが自分の《墓石》を思い浮かべる所まで来ると、なぜかこの当たりで自身の損益分岐点が見えてくる。彼らは市場競争という見えざる神の恣意の手の、いわば「ハイパー・カオス」を泳ぐ潜水士であった。《死は海の底のように静かで、五月の薔薇のように甘美だった》。先鋭化した時間を生きる経済人にとって、「世界はいつも終末論的である。理性とは現実の十字架に於て薔薇を認めることに外ならない」¹¹⁾。彼はもう吹っ切れているのだろう。ニルバーナに達しているのかもしれない。その原動力は、「死線を彷徨う、不屈の「企業家精神」と、「修羅が菩薩になる、健気な若者の「勤労精神」とが同調する、企業体というある種の魔物の生命力である。

【参考文献と参照箇所】

- 1) 『ライブニッツ』山内志朗 著、NHK 出版 (2005.11.15) 102 頁
- 2) 『日本国語大辞典』小学館 (2006) 「かいつぶり」
- 3) 『リクルート用語集』「リスクリング：新たな業務に必要なスキルや知識を習得すること。DX 化が進む現代ではデジタルスキルを獲得する際によく使われる」
- 4) 『ブリタニカ国際大百科事典』Britannica (2006) 「主人と奴隷の弁証法」

- 5) 『経済センサス活動調査(2016)』 中小企業基盤機構「中小企業数 99.7%、同従業者数 68.8%」
- 6) 『小林秀雄 人生論読本』 小林秀雄 篇、佐古純一郎 編、角川書店 (1965.4.20) 115 頁
「「不知の知」を恐れないものは、不信の信も恐れないであろう」
- 7) 『有限性の後で』 カンタン・メイヤース 著、千葉雅也 等訳 (2016.2.20) 9 頁
- 8) 『新しい哲学の教科書』 岩内章太郎 著、講談社(2021.3.12) 54 頁
- 9) 『ライブニッツ』 山内志朗 著、NHK 出版 (2005.11.15) 105 頁
- 10) 『新しい哲学の教科書』 岩内章太郎 著、講談社(2021.3.12) 54 頁 11) 同左 55 頁
- 12) 『歴史的世界に於ての個物の立場』 西田幾多郎 著、哲学論文主第三全集旧版第 9 巻岩波書店(1978) 107 頁

村上春樹「かいつぶり」

岡部 昌平

テレビゲームを見ているようだな……あらためて短編を読みなおしてそう思いました。主人公はパターン化されて描かれたダンジョン（洞窟）の中を単純な目的のために進みます。やがて道が分岐して判断を求められますが、そこは作られた迷路のようにまったく手がかりのない即物的な分岐です。

やがて扉の前にたどり着くと門番との言葉やりとりがはじまります。これはロールプレイングゲームの構造そのものではないでしょうか？ さすがに文芸ですから作家はその対話を楽しみます。三谷幸喜のようなナンセンスな笑いを展開してみせて主人公は扉という関門をクリアします。そして、その向こうに待ち構えているのは怪人「手のりかいつぶり男」。

これはテレビゲームのパロディ？ それとも70年代の理想を見失い個別の幸福を追い求めはじめた80年代への風刺？ これは喜劇なのか、それともスリラーとかサスペンス？ 謎の怪人「手のりかいつぶり男」の登場は、このドラマに続きがあることを暗示しています。

1999年の統一地方選

この短編を読んでいて1999年春の統一地方選のある場面が思い出されました。東京では都議会の補欠選挙に杉並の婦人運動をリードしてきた女性が立候補していました。平日に選挙カーの運転手がないというので（手料理の食べ放題を条件に）お手伝いしたのですが、そのときのことです。

あちこちから市民運動のリーダー級の人たちが応援にきて、そのなかの一人が選挙ポスターの確認で選管に行くというので同行しました。味気ない役所の部屋で対応にでてきたのはいかにもベテランといった風情の職員。ご存じかもしれませんが、そのころの選挙ポスターというのは文字の大きさから写真の割合までまかに規制があり、ほとんど工夫の余地がないものでした。

こちらが試し刷りをしめして確認してほしい旨を伝えると、職員は定規をとりだして無表情にあちこち測りはじめます。規則についてぼそぼそ何か言いながら、ことごとく難癖をつけてきます。測ってわかることはこちらでも確認しているのに。

おもしろかったのはそこからです。寸法だとか割合だとかひと通り確認が終わると色味やら印象やらを威圧するように難癖をつけてきたのです。そこで一瞬の沈黙。すると……

「いやあ、気が付かなかったなあ……そうですかあ。いやそうかなあ……ぼくにはこんな風に見えますけど、そうは見えませんか？」

ポスターを持ち込んだ彼は指摘にとぼけて見せたのです、殺風景な役所に響きわたるように、すこし芝居じみたわざとらしい声で。あああ、やってくれたよ、またここでも決裂かあ。繰り返される対立にうんざりしながらも、気持ちを緊張モードに切り替えようとしていたら……。

なんと、それまでふてぶてしい顔をしていた職員が突然にふきだして笑いはじめたのです。ポスターを確認にきた男が十分に経験のある相手だと感じたようでした。その後は打ち解けた穏やかな会話があって、無事に確認を終えて役所を後にしました。

合言葉だらけの社会

この短編にテーマがあるとすれば合言葉のような気がします。それは向こうとこちらを隔てる扉の鍵であり、世界を隔てる扉はわたしたちと社会を象徴しています。扉は閉ざされてばかりいるのではなく、合言葉によって閉じたり開いたりします。そして合言葉には人格も意味もないことが多いのです。

扉の向こうに待ち構えている怪人「手のりかいつぶり男」にも、おそらく人格も意味もないのです。主人公が求めるすべてを持っていながらも……。そういうカリカチュア（戯画）としてこの作品があるように思います。

カレンダー

大藤 渉

次の方程式を解きましょう。

$$(1) 2+3(2x+5)=1$$

$$5(2x+5)=1$$

「ちょっと、待った。なんで、5が出てくるの？」

「だって、2+3は5だから。」

「確かにそうなんだけれども。」

こうして私も相手も途方に暮れてしまう。答えを知っている側にとって、ここで2+3をすることは受け入れられない。否定されるべき解き方だ。もちろん私だって数学が好きなわけではない。しかし、野球には野球のルールがあるように、数学には数学の考え方があるのだから仕方がない。相手には申し訳ないが、どうにかこの世界の論理をわかってもらうしかない。自分勝手なやり方で数学の世界に臨んでも答えには辿り着けないのだ。

*

「先生、問題です。1+1は何でしょう？」

「2かな」

「残念、違います。正解は田んぼの田です。」

その翌日、同じ人が同じように問うてくる。私が「田んぼの田」と答えると、「残念でした。正解は2です。こんなこともわからないの？」とその人は答える。これでは後出しじゃんけんのやり方と同じだ。この世界において、私は必ず答えには辿り着けないようになっている。その世界は、こちらの出方に応じて、答えが変わる仕組みになっている。問われたときには、すでにその人の手のひらで踊るしかなくなっている。答えと結びついた問いを相手に投げかけられるとき、問われる人はすでに一つの檻の中に入れられているのだ。その中で生きたり、そこから抜け出したりするための規則は檻ごとに決められている。

*

村上春樹の小説「かいつぶり」に出てくる門番は規則に忠実に従って生きている。「昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけない」という規則に。その規則に従って生きている姿を想像すると、少し滑稽で、笑みが溢れてしまう。しかし、毎日、夜になるとお風呂に入ってしまう私自身も、門番のように規則としては意識していないけれども、傍から見ると滑稽かもしれない。5分や15分の遅刻の話が出てくると、笑みが溢れるどころか、過去の色んな記憶が蘇ってきて、冷や汗が流れてくる。時間を守るということを考えない世界に生きる人から見れば、おそらく、あの世界に生きる人達は大変だと笑えるだろう。

門番にとって規則は自らの存在の基盤であり、それに従っている間は、規則が自らの存在を保証してくれる。「合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけない」という上の人の指示を守り、「ドアを開けて、上の人に取り次ぐ」という仕事をこなしている間は、誰からも問われることなく生きることができるのだ。門番は、様々な規則によって存在の仕方を規定されることによって日々の生活を営んでいる。もし「合言葉をど忘れしたってという客を気の毒に思っ

人取り次い」でしまうと、即刻クビになるだろう。クビになってしまうと、自らを支える職を規則とともに失ってしまい、途方に暮れてしまうだろう。そうすると新たに良い仕事を、新しい生き方を探さなければならなくなる。そうなっては困るから、門番は今日も規則に従って生きている。仕事があるというのはいいものだ。

*

村上春樹の小説「かいつぶり」に登場する僕は、貧乏な生活に十分うんざりしていた。「月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュ・アワーの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。」そんな僕は、うまい仕事をみつけた。その仕事は楽で、給料は目玉が飛び出るほど良い。そんな仕事に得るということが、その時の僕にとって残された道だった。傍からみれば、その先は得体が知れなくて、「やめておいたら?」「違う道もあるよ?」と言いたくなる道でも、その人にとってはその道しかないのだ。もしその道で「ある」と言われたドアが見つからないとしても、「ドアが見つからないなら、みつかるまでどこまでも前進するのみだ。」

やがてドアが見えてきて、開いたと思ったら、門番が立ちほだかる。真っ昼間から風呂上がりで姿を表すような門番が。その門番は、上の人に取り次ぐためには合言葉が必要だと言ってくる。僕は、合言葉を聞いたことも見たこともないが、こちらの事情は伝わらない。門番は規則に反するからという一点張りで、合言葉を一向に教えてくれそうにない。僕には僕の論理があるように、門番には門番の論理があるようだ。しかし、こちらも今後の生活がかかっているから、「簡単には引つ込めない」。答えを教えてもらえないならば、合言葉に関するヒントを少しだけでももらうことはできないだろうか。手がかりなしに進んでも、前に進んでいるのか後ろに進んでいるのかわからない。

*

規則に沿って生きている側からすれば、規則に当てはまらないものが目の前に現れると弱ってしまう。規則をそもそも前提にしなくてもよい側からすれば、目の前のものが規則に従って生きている方が困る。一方は、今ある規則にあてはまることでその地位に安住できるが、他方は、目の前の人が今の規則に従い続けるかぎり、自分自身の居場所を与えられないまま留まらなければならない。一方は、規則を保持するために「わかるでしょ?」と行って相手に従ってもらおうとするしかない。ただし、そうするのは、個人的にその規則に従いたいわけではなく、自分自身すらそうせざるを得ないという状況におかれているからだ。他方は、規則の隙間を見つけて、あるいは規則を破ってでも合言葉にたどり着かなければならない。合言葉が何であろうと構わないが、上の人に取り次いでもらわなければ、またうんざりする生活に逆戻りだ。僕にとってこの仕事を手にする以外に道はない。そのためには目の前の門番を突破しなければならない。

*

合言葉を知らない人間が目の前に現れなければ、いつものように、ドアを開けて、上の人に取り次ぐだけで事は済んだだろう。「少しだけヒントをもらえないかな?」と言われなければ、自分の心も傷まず、「わかるでしょ?」でかたをつけることができただろう。「それは規則で禁じられているんですよ」という言葉で目の前の人間が納得してくれたら面倒なことが起こる心配をすることもないだろう。みんなが規則に従って行動していれば、危険を冒す必要もないだろう。それに、そもそも上の人がこのような規則をつくらなければ、こんな葛藤も生まれまいだろうに。

それでも、「僕は黙ってる。あなたも黙ってる。わかりっこないじゃないですか」と目の前

の人間に真剣に言われると、迷いが生じる。たとえ規則を破ったとしても、上の人にばれなければ、目の前の人間も自分自身も万事上手く事が進む。もしそのように事が運ぶなら、それが最も良い道に決まっている。それをわかっていてなお、規則で決まっていることを破るのは怖い。もし何かの拍子にばれてしまったら、クビになるかもしれないという恐れがそれ以外の道に進むことを躊躇わせるのだ。こんなことで悩むくらいなら、それ以外の道もあるということをやめたことにするほうが良いかもしれない。だが目の前の人間が真剣に呼びかけてくると、応答の仕方に迷いが生じてしまう。

*

規則というのは不思議なもので、作られたものとしてすでにある（かのように見える）。それを与えられた側に求められているのは、その規則に当てはまるように生きることだけだ。そこから外れる生き方をするならば、社会から排除される他ない。規則を破ったのだから仕方がない。

ところで、「仕方がない」とはどういうことだろうか。よく考えてみると不思議である。規則によって存在の仕方は定められているのだから、仕方はある。たとえば「合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけない」という存在の仕方はある。仕方なしの存在の仕方は考えられない。ということは、「仕方がない」ということは、その存在の仕方以外の「仕方がない」ということを指すのだろう。

こう考えてみると、規則は、ある特定の存在の仕方（たとえば「合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけない」）以外の存在の仕方（たとえば「合言葉を知らない客を取り次ぐこと」）を存在させないことにするというところに、その意義があるように思える。だが実際のところ、規則を破るといったかたちで、規則によって隠された、見えなくなった存在の仕方が実現することはありうる。だからこそ、規則に当てはまらない存在の仕方は、規則に当てはまって存在するものから否定されるという意味で否・存在なのではなく、現実としては未だ存在していないけれども、余白や何ものかといったかたちで否定されることなく存在するものと考えられる非・存在なのだ。

社会や組織の中で守るべきものとされる規則に直面するとき、一方では「規則なんだから、仕方がない」と言うことによって、それ以外の存在の仕方を否定してしまうが、他方ではそうではない仕方で生きてしまうことによって、規則それ自体は虚構であることが顕わになる。「規則で禁じられてるんですよ」と言い、その規則に準じて振る舞うことで、規則で禁じられていることになる。規則に反する存在の仕方は、見えないように隠されることによって、あたかも存在しないかのように考えられる。しかし、それは考えられた範囲でのことにすぎない。まず規則があってそれぞれの振る舞いがあるのではなく、規則に先立って、まずそれぞれの振る舞いがあるのだ。「仕方がない」で片付けなければ、色々な仕方があるのだ。

*

答えというのは往々にして、誰でもどんな状況でも、正しい応答として想定されている。同様に、合言葉というのも、お互いが合言葉＝正しい応答の仕方を知っているということが重要である。合言葉を知らない者は排除するということが、合言葉の肝なのだ。こう考えてみると、合言葉は、ある種の選別機能を備えている。

しかし、合言葉の内容に踏み込むと、その機能が崩れ始める。なぜなら、答えに対応していた問題がずれてしまうからだ。「ところで合言葉は？」というとき、そこで問題にされているのは、「合言葉とは何か」であり、その答えは、問う者の念頭にある言葉である。しかし、「少しだけヒントをもらえないかな？」という問いを皮切りに、「その合言葉はどのような内容な

のか」が問題になる。そこで、門番から「とても簡単なことばで、水に関係があります」、「食べることはできない」、「最初のことばは、『か』」、「五文字」といった内容がその応答として提示される。僕は、この内容をもとに、「合言葉とは何か」という問題に対して、「かいつぶり」という解を出す。

この解から「合言葉は、かいつぶりなのか」という新しい問いが立つ。僕は、合言葉とかいつぶりの関係ではなく、合言葉の内容とかいつぶりの関係に問題をずらすことによって、突破口を開こうとするのだ。合言葉を前提に、その条件を答えた門番に対して、僕は、その条件の方から合言葉を導き出そうとする。僕は、問いの立て方を変えることによって、元々の合言葉がもっていた地位を揺るがすのだ。合言葉は、僕に遭遇する以前には、その都度の状況とは関係なく無条件に、合言葉それ自体でしかないものであった。しかし、僕がその前提を問いに付すことによって、合言葉は、いまやある条件のもとで成り立つ対象になった。合言葉が門番の提示した条件をみたしている言葉であるとすれば、その条件をみたしている「かいつぶり」が合言葉になるのだ。

そんな僕に対して、門番は、「合言葉はかいつぶりじゃない」と何度もはねのける。選別機能の鍵が選別の対象になると困る。門番にとって、合言葉はやはり、理屈とは関係なしに、合言葉それ自体として存在しているのだ。いやおそらく、合言葉それ自体でしかない言葉を想定することによって、この選別は機能する。合言葉それ自体があるという前提は、破られてはならない前提なのだ。門番は合言葉がなければ見知らぬ人々を選別できない。合言葉が存在するというところからはじめるところに、門番が自身の立場を維持できる秘訣がある。

そこで僕は、門番が合言葉とは何かを言えないのは、「そんなもの存在しないから」と言い放つ。これを機に、問題は「合言葉は本当にあるのか」にずれてゆく。僕は、門番を、合言葉を言わなければ合言葉があることを証明できないが、合言葉を言うてしまうと門番の地位が危うくなるという二項対立の立場に陥れる。僕は、「手のりかいつぶりはおそろしく不味いから犬だって食べない」とわけのわからないことを言いながら、門番に迫る。門番は観念して上の人に取り次ぐことを約束する。こうして、僕は門番を陥落する。

*

「手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、もう一度ため息をついた。」手のりかいつぶり...?この小説の最後の場面、唐突に「手のりかいつぶり」が登場する。これは、水に関係があり、食べることはできないと言われたあの手のりかいつぶりか、それとも上の人を指し示すときに使われる言葉なのか、読者は迷う。前者の読み方であれば、眼鏡のレンズを拭くかいつぶりはおとぎ話でしか成立しそうにないし、後者の読み方であれば、なぜ手のりかいつぶりという言葉で呼ばれているのかよくわからない。「手のりかいつぶりここに眠る」と墓石に刻んであったといわれているから、一層よくわからない。「手のりかいつぶり」なんて呼び名を墓石に刻むだろうか。いや、そう思うってしまうのも自身のおかれている立場ゆえだろうか。

もしかすると、「手のりかいつぶり」とは、手のりかいつぶりという合言葉で強引に扉をこじ開けた僕が、時を経て出世し、そこでつけられたあだ名かもしれない。自分自身も昔はよく遅刻していたのに、立場が変わると遅刻を咎め始めるということはいかにもありそうだ。この道に進めば、これまでの悩みが解消されると思っていたら、結局同じようなことで苦しんでいるということもよくあることだ。たしかに、ある読み手からすれば、ありそうなことで溢れているけれども、そうかもしれないというところで考えはとどまってしまう。

こう考えてみると、この小説には、とりわけ最後の場面には、読み方を規定する決定的な規

則がないように思える。答えが不在なのだ。読者がこの小説を読むとき、ある読み方から自らの読みを浮かび上がらせる。その読み筋に至らしめた根拠はこの小説からある程度、導き出すことができる。ただ、この小説のある別の箇所が、あるいは他の読者の読みが、自身の読み方が決定的に正しい読みだということを許してくれない。それぞれの読み方がこの小説の内容を定めるのだが、正しいとされる内容が想定しえないから、正しい読み方に関する規則をつくることができない。こうして一方では、あらゆる読みがテキストに関して、一定の妥当性をもった肯定される読みとなり、他方では、あらゆる読みを成り立たせている読み方が一つの問題となり、新たな問いを生み出す。

他ならぬ私が何かを読むというときに、そう読めてしまうという原因は、私と小説どちらか一方に求めることができない。読むということのなかには、あらゆる物事が含まれており、読み方がその一部を顕わにする。読み方が変われば、テキストはまったく異なるかたちで浮かび上がるように、その都度のテキストとの出会いは私をまったく異なるかたちで浮かび上がらせる。

この小説はどうにもこう読めてしまう。けれど、ありえた読みの一つでは、この小説は夢の中の話であり、別のありえた読みでは、よくわからない何の意味もない話であり……。ある数学の先生は、当時高校生であった私に「夏目漱石の『こころ』は、今のあなたが読んでも面白いかもしれないけれども、20歳、30歳、40歳と歳を重ねるごとに面白さの中身が変わっていく、それが面白いのよ」と言った。一つの未来では、この小説は私の友であり、別の未来では敵であり……。あのとき夢をえらぶか夢見たままであることが可能だったら、もっと別の読みだったにちがいない。しかし、こう読めてしまうのだから仕方がない。

もし、ある景色に執着するならば、景色は焼き直しにすぎないものになる。しかし、これまで作り上げてきた読み方を一旦忘れて、読みはじめるならば、これまで見えなかった景色がその都度見えるようになる。ここにおいて、問題は、すでに想定された正しい読解ではなく、その読みをなす具体的な状況なのだ。移ろいゆく状況が読みを決める。未だ現実には存在していない読みを生み出すことによって、新しい状況が再び作り出される。人は具体的な状況に身を置いているからこそ、新たな読みを作り上げなければならないのだ。

議論に勝つためだけの言葉

——村上春樹「かいつぶり」を読む——

村上 林造

はじめに

この小説には三人の人物が登場する。これからこの会社に就職しようとする語り手「僕」と、その前に立ちはだかる門番の「彼」。作品結末で「彼」から報告を受ける「上の人」である「手のりかいつぶり」である。

「僕」はこの会社になんとしてでも就職したいと思っているのだが、それはこの会社が「仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い」からである。会社に到着した「僕」は、門番の「彼」から「上の人」に取り次ぐには合言葉が必要と言われ、「彼」からヒントを聞き出そうとする。「彼」は「それは規則で禁止されてる」と言い、しかも前任者が「合言葉をど忘れしたっていう客を気の毒に思っ一人取り次いだけでクビ」になったことから、ヒントを与えるのに躊躇する。しかし「僕」は強引に彼に迫り、合言葉は「水に関係があり……手のひらに入るけれど、食べることはできない」ものを表す「かで始まる五文字のことば」であるというヒントを聞き出す。「僕」はそれをもとに「かいつぶり」という言葉を答え、「彼」が「合言葉はかいつぶりじゃない」と言うにもかかわらず、それが先のヒントの「すべての条件を満たしている」と強弁して、むりやり「彼」に「上の人」に取り次がせるのに成功する。小説の最終場面で、「彼」からインターフォンで取り次ぎの連絡を受けた「手乗りかいつぶり」は、「十五分の遅刻」と言う。

本稿で、私が考えてみたいと思うのは次の三点である。

- 1、「僕」が就職を希望するこの会社の職場環境はどのようなものと考えられるか。
- 2、合言葉を巡る「僕」と「彼」の攻防のプロセスはどのようなことを表しているのか。
- 3、最後にこの会社の「上の人」が「手のりかいつぶり」として登場するのはなぜか。

1、「僕」の求職と会社の職場環境

僕の求職の背景にあるのは、彼が「今どき良い仕事をみつけるのは大変」と言うような非常に厳しい社会情勢である。そういう状況の下では、「仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い」会社への就職において激しい競争が起こるのは当然だろう。実際、僕が訪ねた会社の門番である「彼」の仕事はただ「ドアを開けて」来客を「上の人に取り次ぐ」だけという「楽」なものであるから、これで「給料は目玉が飛び出るほど良い」のなら、「僕」がどんなことをしてもそのポストに就きたいと思うのは理解できる。

それだけに、その会社に入るのには合言葉が求められ、合言葉を知らない者は「上の人」に取り次いでももらえないのは、その厳しさの表れの一つであろう。合言葉を知っている者だけが取り次いでもらえるというのは、それは本人の知らぬところで有資格者は事前に選別されているということだからである。「彼」は「合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われて」おり、現に「彼」の前任者は「合言葉をど忘れしたっていう客を気

の毒に思っ一人取り次いだだけ」で「即刻クビ」になったのだから、就職後もそのポストにとどまること自体が簡単ではないのだろう。また、規則や指示が納得できるものであればともかく、「上の人」の「思いつき」のような「七面倒臭い」指示には疑いが生じる事もある。「昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけない」という「規則」もその一例だろうし、作品結末における上司（「手のりかいつぶり」）の態度から見ても、ここでの上司と部下の関係は厳しい上意下達の関係であることが窺われる。つまり、この会社での仕事は外から見ればただ「ドアを開けて」来客を「上の人に取り次ぐ」だけという「楽」なもので、しかも「給料は目玉が飛び出るほど良い」という「良い仕事」に見えるが、実際に働く人間は会社のシステムに組み込まれた歯車として、意義の感じられない仕事に従事させられるわけで、そういう労働環境に息苦しさや空しさを感じたとしても、「今どき良い仕事をみつけるのは大変」という厳しい社会状況の下ではシステムの歯車に徹する以外にないというのが実情なのであろう。

「かいつぶり」は、そういう会社に入ろうとして必死になる「僕」と、その会社で門番のポストを得ている「彼」の攻防を描くのだが、それは少し見方を変えれば、システムの中でのポストをめぐる者どうしの争奪戦ともいえるし、作品結末に登場する「手のりかいつぶり」は、システム自体を統括する「上の人」のあり様を示す。だが、この小説の面白さは、ある会社における労働環境という問題を、「かいつぶり」という合言葉を巡る攻防の中に凝縮することで、人間の生き方を言語機能の次元において捉え、表現するところにある。

以下でそのプロセスを具体的に追跡してみたい。

2、合言葉を巡る「僕」と「彼」の攻防

合言葉とは、その人物が仲間（味方）であるかどうかを選別、認証するために前もって定められた言葉であり、その言葉を知っているかどうかで仲間と認定したり、排除したりする言葉である。合言葉の機能は、特定の鍵穴には特定の鍵が合うだけで、それ以外のすべての鍵は無効であると同様に、その言葉を知っていれば無条件に認証される代わりに、知らなければ無条件に排除されるという、極めて明解でシンプルな機能なのである。またそれだけに、合言葉を知らない人間がその関門をすり抜けるのは非常に難しいはずである。

では「僕」は、正しい合言葉を知らないのに、どうやってこの関門を通り抜けたのか。それは、「かいつぶり」という贋の合言葉を捏造し、それを正しい合言葉であると強弁して相手を屈服させたのである。しかし門番の「彼」には、「かいつぶり」が正しい合言葉ではないことは自明であるのだから、僕がどんなに「かいつぶりは水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはできない、それに五文字だ。ちゃんと合ってるでしょう」と強弁しても、彼の「だって合言葉はかいつぶりじゃない」という正論の前にどうしようもないはずである。またそのことは僕自身にもよく理解されており、僕は「かいつぶり」という言葉が相手をひっかけ、丸め込むための贋の合言葉であることを承知したうえで、なおそれを正しい合言葉として主張したのである。そんな無茶なことが、どうして成功したのだろうか。

本来、合言葉とは単にその言葉（シニフィアン＝音）だけが問題であり、それ以外のことは一切無関係であるのに、「僕」が、シニフィアンの裏に孕まれたシニフィエ（言葉の意味や内容等）をあえて議論の場に持ち出し続ける。「水に関係があり…手のひらに入るけれど、食べることはできない」というシニフィエは、正しい合言葉を導くためのヒントに過ぎないのに、僕はシニフィエに合致しさえすれば合言葉としての正しさが立証されるというロジックを一貫して主張する。もちろんそれは逆転した論理であり、虚偽の理屈にすぎないが、僕は

そう言い立てることで「かいつぶり」に合言葉として正当性があると主張し続ける。確かに言葉においてシニフィアンとシニフィエの表裏一体性は抜きがたい属性であり、「僕」はその性格を利用して議論の中にシニフィエを滑り込ませたのであり、そこに「僕」の作戦があった。しかしそれだけのことで、「かいつぶり」が正しい合言葉として認定されることはないであろう。

次には、論争における僕の主張に含まれた暴力的レトリックに注目したい。「彼」は「僕」に対して、「ねえねえ、ちょっと待ってくださいよ」……「あなたが何と言おうと、だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんですよ。理屈はともかく違うものは違うんです」……「あなたの理屈は間違ってるよ」……「だって合言葉はかいつぶりじゃないんだから」と繰り返し注意喚起するのだが、「僕」は「彼」の注意には一切耳を貸さない。それは、「彼」の言葉に対応したとたん「僕」の主張が崩れ去るからであり、「彼」の注意をどこまでも無視した「僕」はその危険性を十分認識していたのであろう。

またさらに、「僕」は相手の主張には執拗に「例証」や裏付けを求めながら、自分の主張には何の根拠も裏付けも示さず、当然のように相手に押し付ける態度をとる。次の会話の傍線部分が「僕」の言葉である。

「だって合言葉はかいつぶりじゃないんだから」

「じゃあ何だい？」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「そんなもの存在しないからさ」と僕は能力の許す限り冷やかに言い放った。「かいつぶり以外に水に
関係があって、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」

「でもあるんですよ、ちゃんと」と彼は泣きそうな声で言った。

「ないよ」

「ある」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないですか」

「でもその……手のりかいつぶりを食べるのが好きな犬がどこかにいるかもしれないでしょうが」

「じゃあそれはどこにいるどんな犬なのか、具体的な例証を示してほしい」

「うーん」と彼は唸った。

「僕は犬のことならなんでも知ってるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「そんなに不味いんですか？」と彼は気弱そうな声で訊いた。

「それはもうおそろしく不味い」

「あんたは食べたことある？」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして僕がわざわざ食べなくちゃいけないんだろう？」

「そりゃまあそうですね」

「とにかく上の人に取り次いでくれませんか」と僕はきっぱりとした声で言った。「かいつぶり」

下線部の「僕」の言葉の中に矛盾や自己撞着、論理の破綻を指摘することは容易であろう。それにも関わらず、論争では「僕」の主張が「彼」の正論を圧倒していく。それは「僕」が論争の主導権を握っているからであるが、それはどのようにして可能になったのか。

「僕」にはこの議論の目的が、相手を圧倒して議論に勝ち、自分の要求を通すこと（「上の人」の取り次いでもらい、就職活動に成功すること）であることは自明であった。「僕」は、

成功すればこの会社に就職できるが、この交渉に失敗しても失うものは何もないという立場に立っていた。だからこそ、「僕」は自分の主張が屁理屈であり、虚偽であることを自覚しつつ、なりふり構わず手前勝手な主張を言い立てたのである。それに対し、門番の「彼」にはそんな要求はない。「彼」は「僕」の言い分に耳を傾け、その意を汲み取って対応しようとする。そのような「彼」に対し、「僕」が議論の主導権を握るのは難しくなかつたろうし、主導権を握る者が決まった以上、どちらの主張が正当かということは意味を失ったのである。

「僕」はこういう仕方都合言葉という容易に突破できない関門を突破するのに成功する。それは比喩的に言えば、自分の作った贗の鍵に合わせて鍵穴の形を無理やり変更させたということであろう。それは、どちらの主張が正しいのかには全く関心を示さず、むしろその論点を徹底的に隠蔽して、虚偽の論点に議論を集中させるという仕方であったが、そのような議論の仕方は言葉で自己利益を手に入れようとする者には極めて有効なのである。

そのプロセスを、言葉の機能とそのメカニズムに絞って、次にもう少し見ていきたい。

3、「かいつぶり」というシニフィアンの意味について

言葉とは記号であるから、必ずシニフィアンとシニフィエが表裏一体をなしているが、両者の関係は恣意的であり、さらにシニフィアン（言葉の音・文字）が人間の目と耳で受け止め対象化されるのに対し、シニフィエ（言葉の意味）とは対象化されえない何かであり、人の認識が及ばない領域である。これは、人は言葉の真の意味を把握し得ないということに他ならない。では、合言葉とは何か。それは、シニフィエを切り捨てて（言葉の意味の領域を回避して）、シニフィアンだけに限定することにより、相手を選別排除する機能に特化した言葉である¹。従って、合言葉ではそのシニフィアンを「知っているかどうか」だけが問題で、もしそのシニフィアンへのヒントを出すとすれば、「かで始まる五文字」の言葉、あるいは「二文字目は○」、「三文字目は○」…となるしかない。もしそこでヒントとして「水に関係があり…手のひらに入るけれど、食べることはできない」という形でシニフィエの側面に踏み込んだら、シニフィアンとシニフィエを表裏の形で一体とした記号本来の領域、つまり人間の認識の及ぶ領域と認識以前の領域の境界につれこまれ、迷路をさまようことになる。もちろん人間は日常的に言葉の意味を通じて対象を認識し、世界を生成しつつ生きているのであるから、常にこの境界に生きているといえるのだが、あまりにそれが習慣化し、それに見慣れているために容易にそのことを意識化しないのである。

この小説は、合言葉によって排除されそうになった語り手「僕」が、門番の「彼」との議論で合言葉を捏造して関門をくぐり抜ける話であるが、「僕」は、シニフィエを切り離すことで機能する合言葉に、あえてシニフィエ（「水に関係があり…手のひらに入るけれど、食べることはできない」）を呼び戻し、それを重要な手掛かりとすることで贗の合言葉「かいつぶり」があたかも本物の合言葉であるように強弁し、相手を丸め込み、黙らせるのに成功したのであった。つまり「かいつぶり」という言葉は、「僕」が用いた虚偽のシニフィアンであり、それを巧みに、また強引に用いることで相手を陥れたり、洗脳したり、策略にかけたりする言葉として機能した。この小説で「かいつぶり」とは、相手を打ち負かし、自己利益を手に入

¹ そのような言葉の用い方としては、合言葉に限らず、しりとり、ダジャレ、早口言葉、回文やクロスワードパズル等の様々な言葉遊もそれであろうし、シニフィアンの音的性格をリズムに用いた詩的音楽的領域での言葉、また暗号等高度な記号性を扱う領域もその一例といえるであろう。

れるためのレトリックの機能をもつ暴力的な言葉の象徴であるといえるだろう。

しかしいうまでもなく、あらゆる言葉がそのように暴力的に機能するわけではない。例えば門番の「彼」は「僕」が合言葉を知らないと分かった時点で、「それで、なにかその……、合言葉らしいものは思い出せませんか？」と聞く。そして、躊躇いながらも、「合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけない」という指示に反して「僕」に合言葉のヒントを与えるのである。それは、「彼」の前任者が「合言葉をど忘れしたっていう客を気の毒に思っ一人取り次いだけでクビになっちゃった」のと同様の行為であり、「彼」もまたクビになる危険を冒して「僕」に合言葉のヒントを与えるのはなぜか。それは、外から見れば単に「楽」な職場に見えるこの会社であって、強権的な指示と意味不明な規則に従って機械の歯車のように働かされる労働環境の中では、相手のために親切な行動をとることが、自分自身の存在意義を回復するものと感じられたからではないか。

考えてみれば、言葉には、相手の語りかけを聴き、それに応答してこちらからも語りかけることで人と人との間に通路を開き、共生の場を作り、生の意味を生成する機能がある。そのような言葉のやりとりこそが対話であり、それは互いに心を開いて相手の言葉を聴こうとする姿勢によって可能となる。これは、「僕」の「かいつぶり」という言葉のように、相手に勝つことを目的にした一方的で暴力的な自己主張の道具とは極めて異質な機能を持つ言葉である。相手を打ち倒すために暴力的に機能するレトリックの言葉と、相手との間に通じ合う通路を開く対話の言葉は対極にあるといえる。

対話的な言葉で相手と関わろうとした「彼」は、むしろそのような対話的な態度を通じて、「僕」に扉を開く。このことは逆に言えば、虚偽の言葉にを用いてレトリックを巧みに運用することが、自分の身を守り、利益を手に入れるのに極めて有用であるということでもある。それをさらに敷衍して言えば、社員を機械の歯車のように働かせるこの会社で、有能な社員として周囲に認められ、出世していくのは、「僕」のように言葉を操ることが出来る人間であることを示唆しているのではないだろうか。逆にそういう場所で自分の人間的感情に流され、会社の規則や上司の指示に背いて人に親切にする人間が生き残るのは難しいのではないだろうか。「彼」の前任者がそうであったように、「彼」自身もやがて足元をすくわれて会社を追われる可能性があるだろうし、逆に、次の門番となった「僕」は自分の利益になるように巧みに言葉を操り、会社の中で昇進していくことは容易に想像される。「僕」が捏造して「彼」に押し付けた「かいつぶり」とは、このような組織の中で生き残り、出世するための言葉の象徴であると言えるのである。だとすれば、小説結末で門番の「彼」がインタフォンで連絡した上司が「手のりかいつぶり」であることは不思議でも何でもなく、むしろ強い必然性があるのではないか。

4、「かいつぶり」である上司と職場環境

「手のりかいつぶり」である上司は、「ビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、もう一度ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。「彼」は「また歯医者か」、「もううんざりだ。世界はろくでもないことでみちている」と思う。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりかいつぶりは機械に向けて不機嫌な声で怒鳴った。

「お客です」と門番の声がした。「今日からここで仕事をするんだそうです。合言葉も言いました」

手のりかいつぶりは眉をしかめて腕時計を眺めた。「十五分の遅刻」

「良い仕事をみつけるのは大変」な時代においては、意味不明な「規則」や「指示」に機械的に従うことだけが求められる「楽」な仕事に魅力を感じる人は少なくないであろうが、そういう仕事人が人に充実感や達成感をもたらすとは思えない。それは外部から見れば、「仕事は楽」で「給料は目玉が飛び出るほど良い」魅力的な場所であっても、実のところ働くことの中に意義や価値が全く感じられない場所という他ないし、この会社に入るのに合言葉が求められることは、その業務形態と深く関わるように思われる。この会社の社員は上司の指示や規則に忠実に従うこと、つまり機械の歯車としての動きだけが求められ、人間としての主体的自由は認められず、それ故に仕事に伴う責任も免れている。それは、与えられたシニフィアンをオウム返しに答える事だけが求められ、それと表裏をなす言葉（仕事）の意味と内容（シニフィエ）は捨象されるという意味で、その仕事のありようが合言葉の機能そのものといえるからである。つまりこの会社においては、その仕事が社会的にどのような意義があるかは全く問題でなく、ただ「規則」や「指示」によって「指図」し「服従」させることだけが最も主要な関心であって、それらのあらかじめ決められた約束事を示す（合言葉的な機能）以外の、言葉の生きた意味はむしろ抑圧されなければならないのであろう。

そういう場所で、人が自分の仕事に意義と価値を取り戻すのにはどうすればよいか。一つは、門番の青年が「僕」に合言葉のヒントを与えたように、リスクを冒してでも意味のある行動を選択するということであらう。それはつまり、どれほど「仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い」会社でも、人はそれだけで、機械の歯車になり切ることにはできないということであらう。しかしここには、おそらくもう一つの方法がある。それは、「僕」が「彼」に対してやったように、言葉のシニフィアンとシニフィエの関係を巧みに操作して虚偽の言葉にあたかも価値があるかのように偽装し、意味を作って見せることである。本来意味のないものを、あたかも意味のあるモノのように見せかけること、それによって人があたかも自分の存在と営みに意味があるかのように思いこませること、言葉にはそのような機能が備わっている。この会社で出世し、地位と名誉と金を得た「僕」にとって、その王な言語運用のテクニックは自己正当化に大いに役立つに違いない。² おそらくこの会社の頂点に立つ「上の人」が「手のりかいつぶり」として登場することには、彼がそのように言葉を暴力的に機能させる達人であったことを暗示するのではないか。とはいえ、その言葉が本当な虚偽にすぎないことを彼自身が誰よりもよく知っているのであるから、彼自身の生が不幸であり不機嫌であることを免れないの言うまでもない。この小説の結末はそのことを明確に示しているのではないだろうか。

しかし、ここで「僕」のそのような言葉の運用を目の当たりにした読者は、それとは全く正反対に、言葉には人が他者と関わる対話的な場を作り出し、その中で多義的で豊かな意味を生み出す力を持つはずだということを改めて思わずにはいられない。この小説の意義はむしろそのことの中にこそあるのではないだろうか。

² これは、D・グレーバーによって指摘された「ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論」の業務形態を凝縮的に示しているように思われる。D・グレーバーは、「雇用条件の一部として、従業員はそうでないふりをしなければならないと感じているにもかかわらず、従業員でさえもその存在を正当化できないほど、完全に無意味、不必要、または悪質な有給雇用の形態」を「ブルシット・ジョブ」と命名した。それは、現代の企業組織の中で業務の問題性を言い当てたものとして大きな話題となったが、「昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけない」という仕事など、まさに「ブルシット・ジョブ」そのものであると思われる。

